# サー・トマス・ブラウン著
# 医師の信仰（その一）

生田省悟・宮本正秀　訳

［訳出に当たって］

本稿は、一六四三年に刊行されたサー・トマス・ブラウンの代表的著作、『医師の信仰』(*Religio Medici*)の翻訳を試みたものである。原著は第一部全六十節及び第二部全十五節から成っているが、今回は第一部全六十節までを訳出した。既に堀大司氏による優れた訳業（福原麟太郎編『世界人生論全集』4所収、筑摩書房、一九六三年）が知られているにも拘らず、私たちが敢えて『医師の信仰』翻訳の作業に踏み切ったのは、ブラウン自身のことばを借りるなら、あくまでも「個人的に研鑽を積む」ことを願ったからに他ならない。周知の通り、難解な作品だけに、誤訳の類いも多々あるのではないかと懸念される。ご教示頂ければ幸いである。

翻訳に際しては、直接依拠した *Sir Thomas Browne : Religio Medici and Other Works*, ed. L.C. Martin (Oxford : Clarendon Press, 1964) の他に、数種の版も参照している。翻訳終了時に、一括して紹介することにしたい。註についてであるが、原著に付された欄外註は＊で、また、訳註は（ ）付きの数字で本文中の該当箇所を示した上で、各節の終わりにそれぞれを記載した。なお、頻出する固有名詞は、可能な限り原音表記に近づけるよう心がけたとはいえ、遺漏のあるかもしれないことを断わっておかなければならない。

1643年版　タイトル・ページ

# 医師の信仰

## 読者諸賢へ

この世の全てが終末を迎えたときに、なお生きることを望む者は、まさしく生を貪欲に求めている。[1] また、万物が死に遭遇する中にありながら、己の死に敢えて不満を抱く者は忍苦の思いに欠けると言わざるを得ない。ところで、仮に印刷術の圧制が遍く行き渡ってはおらず、その脅威に喘ぐ人々も私以外に殆どいないのであれば、当の私こそ、不平を訴える理由には事欠かないであろう。しかしながら現実を見れば、印刷術という優れた発明が大いに悪用された[2]結果、国王陛下の御名は汚され、議会の名誉は失墜し、さらに勅令と法令が共に貶められ、推測に任せて歪曲されたまま流布している。[3] こうした世情にあっては、一個人が不満を述べることなど笑止と思われるし、私のような立場の者には、それを正すことなど望めないばかりか、抗することも出来そうにない。もしも友人たちの懇願に応えるべき義務の念を負っていなければ、また、真実への忠誠心に強く支配されていなければ、積極性に乏しい性向から、私は苦しみをひたすら甘受し、時の経過によって他の事象に光が当てられるのに満足を見出し、忘却を償いとしたであろう。とはいえ、今や明らかに誤謬だと分かるものが印刷されているばかりか、多くの真実が誤った形で公にされているという事実がある。この点について言えば、私としても、とりわけ後者に関わりがあると考えざるを得ない。前者を正すのは手に負えない代物だとしても、もう一方を改めるのは私たちの力の及ぶところだからである。従って、私はここに、かつて不完全なまま、不当にも密かに上梓された拙著[4]を、私自身の意に沿う完全な形で世に問うことにした。

告白すれば、およそ七年前、個人的に研鑽を積み満足を得るために私は暇なおりを見つけ、同種の数編[5]と併せて本書を著したのであった。これを一人に伝えるや多くの人々の知るところとなり、転写の度に誤記が繰り返され、ひいては非常に粗悪な写本として印刷に回される事態となってしまった。本書を通読し、さまざまな私事や私見を述べたことばに留意して頂けるならば、著者に公表の意思がなかったことを容易にご理解頂けるであろう。もとより自身のための私的な記述であった以上、ここに記されている事柄は他者に示すべき手本や規範の類いではなく、あくまでも個人としての備忘録に過ぎない。従って、誰かが密かに育んできた識見に合致する特質を含んでいたとしても、本書はそれに賛意を示している訳ではないし、また、誰かの見解と立場を異にする点があったとしても、決してそれを覆そうというものでもない。（申し上げておくが）本書は恵まれた場所と状況の下で書かれてはいない。[6] 当初より、着想を育み記憶を助けるべき良書という支えを頼むことが叶わなかったために、著者の想像するよりも多くの、明らかな思い違いが他人の目には見えてくるのではなかろうか。これは何年も前に記され、当時の私が抱いていた考えを伝えるものであって、変わり行く私の判断を常に導く不変の法則ではあり得ない。だからこそ、以前は尤もだと思われたことでも、今となっては同意し難い場合も少なくない。修

辞的な言い回しで伝えられる事柄も多いし、隠喩の域を出ない表現も多々見られるとは思うが、それは私の意図するところを端的に例示する手段に他ならない。従って、幅広く柔軟な意味で受け取られるべきであって、理性の厳格な考証にはそぐわない箇所もまた多いかと思われる。最後に、本書の内容は全て、より成熟した見識に恵まれた方々の判断を仰ぐものである。既に申し述べた通り、優れた学識をお持ちの方々の承認を頂かない限り、拙論を推し進めることなど出来るはずもない。[7] このような思いを頼みとして、私は内に秘めた私見を公にし、その真実なるところを寛大な読者諸賢一人一人に委ねる次第である。

トマス・ブラウン

(1) セネカ『デュエステース』八八三―四。
(2) 一六三〇年代に反王党派陣営が発行した、夥しい数に昇るパンフレットの類いに言及している。
(3) 例えば、一六四三年には、アイルランドのカトリック教徒に対し、チャールズ一世を支持して蜂起せよという偽の勅令が出されたりした。
(4) 一六四二年に出版された、著者非公認版『医師の信仰』を指す。
(5) 現存するブラウンの作品で、これに該当するものはない。
(6) 本書の執筆時期は、一六三三年から三五年にかけて、ブラウンが研修医としてオクスフォードシャで医療実習に携わっていた頃ではないかと推測されている。
(7) 第一部第六十節の最後に、これとほぼ同じ一文がある。

# 第一部

## 第一節

私の信仰について言えば、世間の人々に、私がそのようなものを一切持ち合わせてはいないと思われかねない状況が幾つかある。私の職業にまつわる一般的な悪評、[1] 私が科学を研究していること、あるいは、信仰上の問題に対していずれにも偏らない私の言動がそれに当たる。私は、ある宗派を強く擁護したり、世間にままあるように、他の宗派に激しく敵対したりすることがない。だが、こうした事情にも拘らず、私が敢えてキリスト教徒という名誉ある称号を戴くことは、決して不当な主張ではあるまい。私にとってこの称号は、洗礼盤、教育、あるいは生まれ育った土地の精神風土だけに由来するものではない。また、理解力のおぼつかないうちに両親から注ぎ込まれた教義を保持するよう育てられたことや、世間の同意するところに倣って、国教会に進むよう導かれたこととは必ずしも結び付いてはいないのである。分別をわきまえた年齢となり、確固たる判断力を得た上で、種々の宗教を知り、それを検証した後に、神の恩寵の原理と自らの理性の法に従い、私は他ならぬキリスト教徒の名を戴くべきだと悟ったのであった。とはいえ、熱心な信仰を抱いたからといって、人類に対する博愛の念を忘れ去った訳ではないし、トルコ人や不信心の者、あるいは（さらに悪い）ユダヤ人を哀れみこそすれ嫌悪している訳でもない。むしろ、私は栄光あるキリスト

教徒の名を戴く己の幸福に満足を覚えるばかりで、それを拒んだ人々を謗るつもりなど全くないのである。

（1）「医者が三人集まれば、そのうち二人は無神論者」という俗言があったという。

## 第二節

しかしながら、キリスト教徒という呼称は、私たちの信仰を表わすには余りに広義であり過ぎる。国々の地図があるように宗教地図も存在し、それぞれの地域はその法律と国境によってのみ区分されるのではなく、信仰の教義と教条によっても画されている。私自身としては、新たにうちたてられた改革派の宗教を信仰するものである。改革派という名称こそ私の好むところではないにしても、その信仰は、私たちの救世主が教え、使徒が広め、教父が権威を高め、さらに殉教者が確証を与えたものに他ならない。ところが、この教えも、王侯の卑劣な意図、高位聖職者の野心と貪欲、堕落しきった時勢により腐敗し損なわれ、本来の美点は跡形もなく失われてしまった。かくして、元の全き姿を取り戻すためには、今の時代の熱心で慈悲心に満ちた人々の手が必要となった。だが、このような尊い仕事に着手した人々がたまたま卑しい身分に置かれ、[1] 乏しい手段しか持たず、敵対する者の嘲りと侮りの的になっていることに、私は感嘆せざるを得ない。当初、不遜な異教徒がキリストと使徒に異を唱えたのも、[2] 何らこれと変わるところがなかった。

（1）ちなみに、ルターは坑夫の息子であった。
（2）『マルコ福音書』六・二―三。

## 第三節

それでも私は、かたくなな態度に終始する人々と対峙し矛先を交えるような真似はしなかった。彼らは、朽ちた船底のまま、それを補修のために船渠に運び入れようともせず、敢えて大海に漕ぎ出したのであり、何事も切り捨てることなく全てを無差別に保持し、過去の経緯を顧みず現状に執着している。私たちは、彼らと敵対するよりはむしろ新たな道に入ることを選んだ。彼らと私たちの間に交わされた誹謗や罵詈雑言も、大義の相違に基いているのではなく、互いの感情の行き違いから生じたに過ぎない。それを除けば、両者は同じ称号、一つの信仰、不可欠な教義の体系を共有する間柄にある。従って、私は、彼らとことばを交わし共に暮らすこと、また私たちの教会がない場合には彼らの教会に入り、彼らと共に、あるいは彼らのために祈りを捧げることを厭わない。私としては、異教の寺院に入りその身を汚すことをイスラエルの子らに禁じた聖書の数々の記述に、それほどの意義があるとは思えなかった。私たちは等しくキリスト教徒であり、自らの祈りとそれを唱える場所を汚すほどの忌むべき不敬な思いによって分かたれるべきではない。堅固な良心の持ち主なら、創造主を敬うのにところを選ばないであろう。それが祈禱のために特別に設けられた場であれば、なおさらではな

いか。仮に彼らの祈りが神の機嫌を損ねたとしても、私の祈りがそれを取り繕うであろう。彼らの祈りがその場所を汚そうとも、私の祈りがそれを清めるであろう。(世の人々にとっては危険な)聖水と磔刑像ですら、いささかも私の判断を欺き、私の信仰を誤らせることはあり得ない。告白するが、私は生来の気質により、熱烈ながら誤った信仰を抱く人々が迷信と呼ぶところのものに引かれてしまいがちである。私が日常用いることばは簡潔であり、振舞いは謹厳で、ときに鈍重でさえあることも認めたい。だが、信仰においては、作法に倣って膝を屈し、脱帽し、手を組むといった、目には見えぬ敬虔な思いを表わしかつ促すべき明確な外面的動作を取るのにやぶさかではない。私は教会の窓を壊すよりも己の腕を傷つける方を選ぶであろうし、聖者や殉教者の記念碑を自ら進んで汚したりするつもりはない。十字架や磔刑像に臨めば、帽子を取ることも出来るが、その際に救世主を思ったり、思い出したりすることは殆どない。巡礼者たちの無益な行脚を哀れみはしても、嘲ったりは出来ないし、托鉢僧の悲惨な境遇を侮ることも出来はしない。たとえ誤った立場にあるとはいえ、何らかの信仰心を見出せるからである。アヴェ・マリアの鐘*を耳にすれば、私は常に敬虔な思いに駆られ、胸の高まりを覚えざるを得ないが、それはキリスト教徒として十分にふさわしいことだと思われる。だが、彼らが聖母崇拝という点で誤りを犯しているからといって、私が無言のまま、それを嘲笑すれば、全てにわたって誤りを犯してしまうことになるに違いない。だからこそ、彼らが聖母に祈る傍らで、私は神に祈りを捧げ、祈禱の然るべき手順を踏むことによって、彼らの過ちを正してきたのだ。厳かな葬列を目にしたおりに、私は涙が溢れるのを禁じ得なかったが、一方、敵意と偏見で目の利かなくなった同胞は、それを大袈裟に侮り、物笑いの種にしたのであった。疑う余地もなく、ギリシャ、ローマ、アフリカの各教会にも厳粛な儀式や典礼は存在し、分別を備えた信者が熱心にキリスト教徒としての勤めを果たしている。しかしながら、これでさえ、私たちの非難するところとなっている。そのような儀式自体が悪だというのではない。責められるべきは、迷信である。それは、真理の表面をはすかいに見る民衆と、美徳の本質かつ中心を究めながらも、おぼつかない足取りで周縁に逸れてしまいがちな、曖昧な判断力の持ち主とを引きつける餌に他ならないのだ。

* 毎日、六時と十二時に鳴らされる教会の鐘。これを聞くと、誰もが、家にいようと街頭にいようと、とにかくその場で祈りを唱える。通常、この祈りはマリアに捧げられる。

## 第四節

多くの宗教改革者がいたように、宗教改革運動の数もまた多かった。各国がそれぞれ独自の手段と方法を用いつつ、その国民の利害や気質、あるいは精神風土に応じて改革を図っている。血気にはやり極端に走った場合もあるが、節度を保ち穏便にことに対処した上で、社会を引き裂くというのではなく徐々に二分し、対立する人々がやがて和解する可能性をみごとに残した国もあった。争いを好まぬ人々はまさにこれを望み、時の経過と神の慈悲によって成就され

ることを思い描いている。とはいえ、両極端に位置する者同士が敵意を露わにする現状のみならず、反目し合う立場、感情、見解を考慮すれば、そのような期待を抱くのは、天の両極の合一を願うに等しいことなのかもしれない。

## 第五節

ところで、私自身をより厳密に規定し、その立場を明らかにすれば、私が信仰の拠りどころとしている国教会ほど、あらゆる点で私の良心にふさわしく、しかもその信条、規律、慣習が理に適い、あたかも私の信仰に合致すべく作られたと思われる教会は他にない。国教会に忠誠を誓った僕として、私は、その信条に従い、その規律を遵守するよう努めるという二重の義務を負っている。それ以外は何であれ、自らの理性の定めるところ及び自らの信仰心の性格と流儀から見れば、取るに足らないことだと言わざるを得ない。即ち、ルターが是としたから信じるとか、カルヴァンが非としたから拒絶するとかいったことはしないのである。また、トレント公会議で議決されたことの一切を非難したり、ドルト教会会議[1]で定められたことを全て是認する訳でもない。要するに、聖書が口をつぐんでいるときは、国教会が私の正典となり、聖書が語るときには、国教会が私のための注釈となってくれている。両者が共に沈黙している場合には、私は信仰の規範をローマやジェノヴァから借用したりはせず、自らの理性の命ずるところに従うのである。私たちの信仰の起源がヘンリー八世にあるというのは、私たちの敵が吹聴する不当な醜聞か、または私たち自身の愚かな誤謬に他ならない。ヘンリー八世は教皇を受け入れなかったものの、ローマ教会の信仰を拒絶したのではなかった。彼は、先王たちが過去の時代に求めかつ試したこと、あるいは現代のヴェネチア国が企てたのではないかと思われることを成し遂げたのであった。[2] ローマの司教について、卑俗な悪口や汚らわしい嘲りの言葉を発するのは慈愛を欠いた行ないである。この世の王たる司教に対して、私たちには慎みあることばを用いる義務がある。彼と私たちの間に感情的な隔りがあるのは認めざるを得ない。私は彼に破門を宣告された身であり、彼が私に与える最上のことばは異端者である。だが、私が彼を反キリスト、罪の人、バビロンの娼婦[3]などと呼び返すのを誰かが耳にすることは断じてない。反抗することなくひたすら甘受するのが慈愛の手段である。説教壇から日頃発せられる諷刺と嘲りは、論理よりも修辞に耳を傾ける民衆には訴えるところ大であるかもしれないが、それでは賢明な人々の信仰を堅固にすることは出来ない。彼らは、正しい大義が感情の庇護にすがるのではなく、節度ある議論を支えとするという事実を知っているからである。



(1) 周知の通り、トレント公会議（一五四五―六三）では、いわゆる反宗教改革の立場からカトリックの教義が確認された一方、ドルト教会会議（一六一八―九）では、カルヴァン派の教義が定められた。

(2) 教皇パウルス五世は一六〇六年、ローマ教皇の権威を拒絶した罪で、ヴェネチア共和国を破門した。

(3) 『ヨハネ黙示録』一七・五―六を踏まえた表現。

## 第六節

私は、意見の相違がもとで誰かと袂を分かったこともなければ、自分の判断と食い違うからといって、他人の判断に腹を立てたこともない。数日後には自らの考えが変わる事態もないとは言えないからである。[1] 私は宗教について議論する才能に恵まれておらず、むしろそれを避けるのが賢明だと考えることがしばしばある。殊に、私が不利な立場に置かれているときや、私の弁護が至らないために真理の目的とするところが害を被りかねない場合にはそうだと言える。知識を得ようとする際には、より優れた人々と論を闘わせるのが良い。だが、意見を確固たるものにするには、自分よりも見識の劣った人々と論じ合うのが最適である。何度となく相手の議論に勝利を収めていけば、自らの判断の基準が定まり、見解も確かなものになろう。誰もが真理の戦士としてふさわしい訳でもなく、真実の大義を守るべく、戦いを受けて立つのに適している訳でもない。多くの者がこの箴言を知らぬまま、真理のために激しく情熱を燃やし、余りにも性急に誤謬の軍勢に挑んだあげく、敵の戦利品となってしまっている。人は城市を所有するように真理をも所有するところではあるが、降伏を余儀なくされる事態も予想される。だからこそ、真理は戦場で危険に晒すよりも、平穏なうちに享受すべきなのである。仮に何らかの疑念が行く手に生じたならば、私はそれを忘れ去ってしまうか、少なくとも、より確固とした判断力と成熟した理性が解決してくれる時の到来を待つことにしている。私には、各自の理性こそがそれぞれにとって最良のオイディープスではないかと思われる。適切な休戦期間を置けば、私たちの変わりやすく脆弱な判断を虜にした狡猾な誤謬の束縛を解く術も、理性によって見出されるであろう。真理が二つの顔を持つとされている哲学において、私ほど逆説的な人間はいないのではないか。とはいえ、神学に関しては、私は正道を歩むことを好む。盲従するのではなく、謙虚な信仰を抱きつつ国教会の大車輪に準ずるものであって、自らの頭脳の周転円に基く独自の磁極や運動に固執したりはしていない。この方法に頼る限り、異端、分派、誤謬が私に入り込む余地はないし、また、こう述べても真理を損なったりはしないと思うが、今のところ、私には汚点も染みも見当たらない。敢えて告白すれば、若き学徒であった頃の私は二、三の事柄に毒されていた。だが、そのいずれもこの数世紀のうちに生じてきたのではなく、既に廃れた古いものであり、私のような常軌を逸した迷える頭脳の持ち主によらなければ決して甦るはずもなかったに違いない。実際、異端はその創設者と共に滅びるのではなく、アレトゥーサの川[2]のように、ある地点でその流れが途絶えたとしても、別の地に再び現われてくるものである。一つの公会議が一つの異端を根絶やしに出来る訳ではない。当分は消え失せるかもしれないが、時が巡り、天空がかつてと同じ様相を呈する頃には再度出現し、もう一度異端宣告を受けるまでは栄えることになろう。あたかも輪廻転生が存在し、一個の人間の魂が誰か他人に入り込むことがあるように、種々の見解もしかるべき周期を経た後に、最初にそれを生み出した者に似た人物や精神を見出していく。自分自身に再び出会うのに、プラトーンの歳月を[*3]待つ必要はない。

人は誰も、自分一人で終わるということにはならない。名前まで同じというのは稀かもしれないが、多くのディオゲネースやティモン[4]が存在してきた。人は繰り返し生きるのであり、今の世も過去にあった時代の再現である。どのような人の場合であれ、その死後に、あたかも当人の甦りとしか思われないほど酷似した人物が現われてこなかったためしはかつてなかった。

＊　数千年の周期を経て万物は原初の状態に回帰し、プラトーンも、かつてこの説を講じた学苑で再び教えるであろう。

(1)　この一節とモンテーニュ『随想録』二・一二との類似を指摘した注釈者に対し、ブラウン自身がそれを否定している。これについては、本稿が依拠したマーティン二九〇ページに詳しい。

(2)　オウィディウス『変身譚』五・四八七―六四一。アレトゥーサの泉はアルカディアを流れてアドリア海の下を潜り、シキリア島で再び地上に現われたという。

(3)　『ティマイオス』三九c、『国家』五四六b参照。なお、『ハイドリオタフィア』(*Hydriotaphia*) 五にも、プラトーンの歳月に関する言及がある。

(4)　言うまでもなく、この二人のギリシャ人は、それぞれキニク学派の哲学者、嫌人家として知られていた。

## 第七節

さて、私の心を捉えた異端の第一は、人間の魂は肉体と共に滅びるものの、世界の終末の日に甦るというアラビア派の教え[1]である。私自身、魂の死滅を完全に受け入れていた訳ではなかった。ただ、後に私の哲学ではなく信仰が徹底的に否定したこととはいえ、もし魂が死滅するのであれば、また魂と肉体が共に墓に入るのであれば、魂も肉体と同様に復活するのではないかという考えを抱いたのであった。確かに、私たちがこの世の終わりを告げる喇叭の音を聞くときまで闇の中で眠り続けるとすれば、それはそれで私たち人間の取るに足らぬ属性にふさわしいことではあろう。何の値打ちもない我が身を厳粛に顧みた私は、自らの魂の特権を主張するのも憚られ、終末の日に救世主の姿を目にする喜びが得られるなら、殆ど永遠と言えるほど長い期間であっても、無になることに耐えられると思われたのだ。異端の第二はオーリゲネース[2]の説いたもので、神は永劫に罰をお与えになるのではなく、一定の時が過ぎれば怒りを鎮められ、地獄に落ちた魂を責苦から解放して下さるということであった。私は、神の偉大な属性である慈悲について真剣に思いを馳せていたおりにこの誤謬に陥ってしまい、しばらくの間、これを密かに育んでいた。この過ちには忌むべき点が見出せず、憂鬱な者や物思いに耽る者が陥りやすい、絶望というもう一方の極に私が傾くのを呼び戻してくれる好ましい錘だと考えたからである。異端の第三に関しては、私はこれを確信を抱いて保持したこともないし、行動に移したこともない。ただ、私は、これが真理に適い、決して私の信仰を損なわないものであればと常々願っていた。それは死者のための祈りであった。私は慈悲の念からこれに傾倒し、鐘の音を聞けば友への祈りを抑えられず、友の亡骸を前にしては、その魂のために祈りを捧げずにはいられなかった。これこそが後代に記憶されるための良い方法であろうし、歴史に名を留めるよりも遙かに尊いことでは

ないか。私は以上の見解を頑なに保持していた訳でもないし、誰かを私と同じ考えに引き込もうと努めた訳でもなかった。まして、それを口にして、親友と論じ合ったりもしてはいない。即ち、私はこれらの考えを他人に広めたこともなければ、己のうちで確固としたものに作り上げていったのでもなく、ただ、新たに燃料を加えたりせず、それ自体で燃え上がるのに任せていただけなのである。やがて、その火はいつの間にか消えてしまっていた。従って、これらの見解は正規の公会議では有罪宣告を受けるものだとしても、私自身にあっては決して異端とはなり得なかった。むしろ、私の悟性の単なる誤りや逸脱の類いに過ぎず、意思の堕落を伴ってはいない。異端を説く者は、悟性を堕落させるのみならず感情をも蝕んできた。他と一線を画そうとすれば必ず異端の見解を持つことになり、ある見解を唱導すれば必ず一分派の創設者になってしまう。これこそが、ルチフェルの行なった最初の分派分裂の忌むべき点である。彼は一人で過ちを犯すだけで満足せず、数多くの天使を自らの仲間に引き込んだ。さらに、その経験に基き、エヴァ一人を誘惑することとなった。罪の持つ伝わりやすい性質と、一人を欺くことは暗黙のうちに結果として二人を共に惑わすことになるという次第を彼は十分に心得ていたのである。

(1) 詳細については不明であるが、この異端は、いわゆる霊魂死滅論に相当する。

(2) アレクサンドレイアの神学者（一八五頃―二五四頃）。聖書研究に、プラトン哲学に基く解釈法を導入したことで知られている。

## 第八節

異端が生じるというのはキリストの預言[1]にもあるが、古い異端が滅びるであろうといった預言はどこにも見当たらない。異端が必ずや起こる事態[2]は私たちの国教会のみに当てはまるのではなく、他の教会についても言えることである。異端の教義においてさえ、さらなる異端が生じるであろうし、アレイオス派は彼らの教会から分離したに留まらず、自らの内部でも分裂を起こしている。[3] 分派を指向し革新を望む素地を持った者は、当然ながら共棲を好まず、一個の組織の規律や秩序に縛られるのを善しとはしない。そのために、他から離れ分派を起こしたとしても、互いの結び付きは緩やかであり、かつて所属していた教会が大きく二分されただけでは満足せず、さらに細かく分離分裂したあげく、殆ど個別の原子同然となってしまうのだ。事実、特異な資質と気質を持つ人間はいつの時代にあっても独自の見解と発想を有するもので、己の教会や他の教会の教説はもとより、個々の著作家の見解に対しても、そこに何らかの新奇な考えを付け加えてきている。とはいえ、冷静な判断力の持ち主ならば、そのようなことをしたとしても怒りを買わず、異端の謗りを受けることもないに違いない。数々の宗教会議の教令やスコラ学派の精緻な論理にも拘らず、多くのことが想像もつかぬまま手付かずになっているからである。これらに関しては、誠実な理性が自在に活躍し縦横に闊歩したとしても、異端の枠内に踏み入る恐れは全くないと思われる。

（1）『マタイ福音書』二四・一一。
（2）『コリント前書』一一・一八―九。
（3）キリストの神性を否定したアレイオス派は、コンスタンティヌス帝の招集したニカイア公会議（三二五）で異端とされた後、いくつかの集団に分裂していった。

## 第九節

頭脳明晰な人々を惑わしてきた捉え難い神性の謎や宗教の霊妙な奥義が、この私の頭を悩ませたことは全くなかった。思うに、積極的な信仰を抱く者にとって、宗教に不可能は存在しない。私たちの信仰に潜む深遠な神秘は、精緻な理論と理性の法則によって例解され、支持されてきた。私は、神秘に浸って我を忘れ、理性の導く後を辿り、「ああ、深遠なるかな」[1]という思いに至ることを願っている。化肉や復活に加え、三位一体にまつわる不可解な謎や難問を自らの理解力に投げかけては、一人孤独なおりの慰みとしてもいる。悪魔や私自身の不従順な理性が申し立てたあらゆる異議に対し、私は、テルトゥリアーヌス[2]から学んだ「不可能なるがゆえに確かなり」という奇妙な解答をもって応じることが出来る。極めて難解な点においてこそ、私は信仰心を行使したい。目にも明らかなありきたりの対象を信じるのは、信仰ではなく納得したのに過ぎない。キリストその人の墓を見て信心を深め、紅海を見るに及んであの奇跡[3]についての疑念を捨て去る者がいる。それとは違って私は、奇跡が起こった時代に生を受けなかったことや、キリストとその弟子たちに出会わなかったことを喜び、感謝している。私には、自分が紅海を渡ったイスラエル人の一人であればとか、キリストの奇跡に与かって病を癒された者たちの一人であればなどと望んだりする気はなかった。仮にそうであったとしたならば、信仰を押し付けられた形になったであろうし、目撃しないまま信じるに至った人々に等しく宣せられる、あのより大きな祝福[4]を享受する機会にも恵まれなかったに違いない。目と感覚で検証したものを信じるのは、安易かつ必然的に生じる信心である。私はキリストが亡くなり、埋葬され、復活したことを信じており、墓の中のキリストを思うよりは栄光に包まれたその姿を見たいと願っている。墓の中のキリストについては多くを信じる必要はない。理性がある以上、その事実を受け入れるか否かは歴史に頼れば事足りるのである。キリストの降誕以前に生きていた人々だけが、大胆かつ高貴な信仰を抱けるという利に恵まれていた。彼らは曖昧な予言と謎めいた予表に基いて信仰をうちたて、明らかに不可能と思われる事態に期待を寄せることが出来たからである。

（1）『ロマ書』一一・三三の最初の二語。本文中のラテン語は、ウルガタ訳聖書からの引用である。
（2）カルタゴ生れの神学者（一六〇頃―二二〇頃）。キリストの復活の奇跡が「不可能なるがゆえに確かなり」としたことで知られている。
（3）『出エジプト記』一四・一五―二九。
（4）『ヨハネ福音書』二〇・二九。

## 第十節

堅固な信仰には常に刃があり、これを信仰の剣という比喩を用いて容易に言い表わすことが出来る。だが、先に述べた捉らえ難い点について、私はむしろ使徒に倣って、楯[1]ということばを用いたい。私には、慎重な戦士がこの楯に守られ、傷つくことなく横たわるさまが思い浮かばれる。私が人の無知であることを知る者である以上、私の理性は信じようとする意思に対して柔軟な態度を取ってきた。今や私は、神秘を厳密な定義によらず、平易なプラトーン的描写に基いて理解することに満足を覚えている。また、ヘルメースのあの寓意的な記述*[2]は、神学者のいかなる形而上学的定義にもまして喜ばしく思われる。理性が満たされない場合には、私は想像を巡らすことを好む。「魂は人の天使にして神の肉体[3]」と説かれようと、「魂は現実態[4]」と言われようと、私にとってはいずれも等しく好ましい。また、「光は神の影[5]」あるいは「光は透明を動かす力[6]」と言われたときも同様である。[7]余りにも深遠で理性の及ばぬほど不可解な事柄の場合には、それを描写し、迂言し、輪郭を辿っておくだけにするのが良い。目に見えて明らかな自然の作用すら表現し得ないことを理性に知らせれば、理性は信仰の持つ霊妙さに対してより謙虚で従順になるからである。このようにして私は、粗野で頑迷な自らの理性に、信仰の誘いに従うことを教えたのであった。私は、人類の不幸な祖先がその果実を味わったという樹木が既に存在していたのを信じて疑わない。たとえ、神がそれを食べるのを禁じられたと書かれているのと同じ一章に、神が大地に雨を降らせて下さらなかったために野の植物は未だ育たなかったと明言されている[8]としてもである。また私は、蛇（文字通りに理解すれば）が呪いを受ける以前から、その本来の姿で地面を這っていた[9]と信じている。神はユダヤ人に処女の証しを立てるよう命じられた[10]とされているが、これは誤りを生じかねない試練ではなかったか。経験と歴史の教えるところによれば、神が全ての女に宣せられたと思われる出産の呪い[11]を個々に逃れた多くの女がいるばかりか、一民族が揃って免れた場合もあったという。たとえ理性がこれらの誤りを説いたところで、私は全てが真実だと信じている。理性の及ばぬことだけでなく、理性に反することや生来の感覚の主張に逆らうことを信じるのは、決して卑俗な信仰には当たらないのではないか。

* 中心がどこにも存在し、その外周がどこにも存在しない円。

(1) 『エペソ書』六・一六。

(2) 十二世紀の、いわゆる『偽ヘルメース文書』にあった神の定義を借用しているらしい。これは、中世、ルネサンスを通じて広く知られた概念であった。詳細については、マーティン二九〇―一ページを参照。

(3) パラケルスス『賢者の哲学』二。

(4) アリストテレース『霊魂論』四一二a。

(5) フィチーノ『光について』四。

(6) アリストテレース『霊魂論』四一八b。

(7) 以上、具体的な実例から明らかなように、ブラウンには定義というものを強く嫌う傾向があった。

(8) 『創世記』二・五、一七。

（9）同書三・一四。これについては、『伝染性謬見』（*Pseudodoxia Epidemica*）五・四でも論じられている。
（10）『申命記』二二・一三―二一。
（11）『創世記』三・一六。

## 第十一節

引き籠もって孤独な想像に耽る際（柱廊や臥所が我を招けば、心進まぬことなし）[1]、私は一人きりではないことを心に留め、常に私と共にある神とその属性、とりわけ叡智と永遠という偉大な二つについて瞑想するのを忘れはしない。私は自らの悟性を、叡智を思うことで活気づけ、永遠を考えることで困惑させている。永遠について、誤りを犯さずに語り、恍惚を覚えないまま思いを馳せることの出来る者がいるであろうか。時についてであれば、私たちにも理解出来るかもしれない。時は私たちよりも五日だけ早く生まれたに過ぎず、その運星の相も世の人々と同じである。だが、始点も終点もないと思われる存在について、その始まりを理解しようと遙かな過去へ溯ったり、その終わりを捉えようと無限の彼方を目指したりすれば、私の理性は聖パウロの聖所[2]に導かれてしまうに違いない。私の哲学からしても、天使にはそれが可能であるなどと敢えて断言するのは憚られる。神は、ご自身を理解し得る被造物をお創りにならなかった。神を理解するのは、神ご自身の属性に備わった特権なのだ。ご自身を定義された神は、「我は、我ありという者」[3]と、モーセに向かって語られた。この余りにも短いおことばは、神に向かって、神とは何かと問いを発した人間を困惑させたものであった。事実、神のみが存在しておられるのであって、他は全て、かつて存在していたか、存在する予定となっているかのいずれかに過ぎない。だが、永遠においては時制の区別などあり得ない。従って、多くの劣った頭脳の持ち主が理解に苦しみ、賢い者たちが説明に窮してきた、あの天命という恐ろしいことばも、神の側からすれば、私たちの将来が予め定まっているというのではなく、一気に発せられる絶対的な神意の現われ[4]と考えるべきではないか。しかも、それは発せられた瞬間に、既に成就しているのである。不可分にして一体の神の永遠に応じて、終末の日を告げる喇叭は既に吹き鳴らされており、神に見捨てられる者は炎の中にあり、祝福を受ける者はアブラハムの胸[5]に抱かれている。神からすれば一千年も一日と同じ[6]と聖ペテロは述べたが、そのことばは控え目なものであった。哲学者に倣って言えば、幾千年にもわたる瞬間瞬間の時の流れさえ、神にとっては一瞬にも満ちはしない。私たちにとっての未来も、神の永遠にとっては現在である。神のおられる全期間はまさに永遠という一点に他ならず、そこには継続も部分も、あるいは変遷も分割もあり得ない。

（1）ホラーティウス『諷刺』一・四・一三三―四。
（2）第九節の訳註（1）と同じく、『ロマ書』一一・三三を踏まえている。いくら努力したところで、理性も、結局は神の測り難い叡智と知識に関する聖パウロのことばに頼らざるを得ないというのであろう。
（3）『出エジプト記』三・一四。
（4）『サムエル後書』二二・一六や『詩篇』一八・五を踏まえた表現。

(5) 天国の意。『ルカ福音書』一六・二二。
(6) 『ペテロ後書』三・八。

## 第十二節

三位一体の神秘をさらに難解にするほどの新たな属性は一切存在しない。また、それは父と息子の関係に例えられてはいるが、いずれが優位かを決定することも出来はしない。アリストテレース[1]はどのようにして世界の永遠を理解したのであろう。あるいは、二つの永遠[2]をどのように立証してみせたのであろうか。彼による、正方形に含まれた三角形という直喩は、私たちの魂の三位一体を、あるいは神が三にして一であることを例示しているのではないか。[3] 私たちには、三個の魂ではなく三位一体をなす魂がある。というのも、明確に分かれた三つの魂とまでは言えないにしても、個別に他の主体にも入り得る、また現に入っている三つの異なった力が私たちに宿っており、それらが結び付いて一つの実体としての魂を成しているからである。仮に一つの魂が、三つの異なる肉体に宿るほど全きものであったとしても、それは取るに足らぬ三位一体に過ぎない。知性によって分離分割される三ではなく、現に一個として成立している三を思わなければならない。それこそが、完全な三位一体である。私は常々、ピータゴラスの神秘的な手法と数字に秘められた魔力[4]を賞賛している。哲学を警戒せよという[5]格言は、余りに広義に受け取られてはならない。哲学が向き合うべき、この自然という巨塊には一連の事物が存在し、それらの額には、大文字ではなく速記術の記号によって神性を示す何らかのことが記されているからである。これは、より賢明な理性にとっては深遠な知識における導きの光として働き、また、健全な信仰にとっては神性の高き頂きを究めようとする際の階梯となり得る。厳格なスコラ学派がいくら嘲笑したとしても、私にヘルメース哲学を放棄させることは出来ないに違いない。可視の世界が不可視の世界の写し絵に他ならないとするヘルメース哲学にあっては、この世の事物は写生画と同じで、真実ではなく曖昧な姿を呈しているに過ぎず、目には見えない構造[6]に存在する真の実体を模写するばかりだと考えられているのだ。

(1) 『天体論』一・一〇―一二。
(2) 可視の世界と不可視の世界の永遠。
(3) 『霊魂論』二・三。アリストテレースはここで、より複雑な四角形がより単純な三角形を含むように、霊魂に感覚的要素のあることは、そこに、より劣った植物的(栄養的)要素が存在することを意味する、と説いている。ブラウンはこの説を発展させ、三角形の概念が、植物的、感覚的、理性的という三つの力を包括する霊魂の属性と符合すること、さらに霊魂の三重の成り立ちが三位一体の神になぞらえられることを述べている(マーティン二九二ページを参照)。
(4) ブラウンは、『キュロスの庭園』(*The Garden of Cyrus*)で、五という数字の持つ意味についての考察を行なっている。
(5) 『コロサイ書』二・八を踏まえた表現。
(6) 『偽ヘルメース文書』に度々見られる、新プラトーン主義哲学の概念であったらしい(マーティン二九三ページを参照)。

## 第十三節

私の祈りに活気を与えるべき、もう一つの神の属性は叡智である。私はこれを喜びとし、この一点を思うだけでも、学問の道に進むよう育てられたのを悔いたりはしない。いずれの分野の知識であれ、努力が十二分に報われることこそ、私が世の人々に勝っている点であり、それに私は満足感と充足感を覚えている。叡智は神の最も麗しい属性である。誰も到達し得ないとはいえ、ソロモンがそれを望んだとき、神はお喜びになられた。[1] 神は全てを知っておられるがゆえに賢き方であられ、全てをお創りになられたがゆえに全てを知っておられる。だが、神の最も偉大な知識は、お創りになられなかったもの、即ちご自身を理解しておられることである。これはまた、人間の知識の極みでもある。そのためにこそ、私は自らの職業に敬意を払い、かつ悪魔の教えすら受け入れるのにやぶさかではない。悪魔が、かつてデルポイで行なったような訓示*[2]を楽園でも与えてくれたならば、私たちは自身を遙かに良く知り得たであろうし、悪魔を知るのにもそれほど恐れを抱かずに済んだのではないか。私は、神があらゆる意味で叡智をお持ちであり、私たちの理解し得る事柄において驚嘆の対象となっているのを知っている。だが、私たちの知識の及ばない事柄においてこそ、大いに神に驚嘆すべきであろう。私たちははすかいに眺め、何かに映る姿や影を通して神を見ているに過ぎないからである。私たちの理解力はモーセの目よりも曇っていて、神性の背面[3]や下部を何も知りはしない。神慮の迷宮を探ることなど、人間にとっては愚行に他ならないし、天使にあってすら傲岸不遜と言うべきであろう。天使も私たちと同じく神の僕であって、元老院議員ではないのである。神が開かれる会議は、あの三位一体による神秘的なもの以外には存在しない。三つの位格が出席されるとはいえ、布告を発せられるのはただ一つの御心であり、矛盾の起こることはない。神はまた何も必要となさらず、その御業は熟慮の末に生じたものでもない。神の叡智は、何が最善かをもとよりご存じなのである。神の知性は、至高かつ純粋極まりない善の観念に満ちておられる。私たちにとって二つの行為である熟考と選択は、神にあっては一つに過ぎない。神の御業は、神意が発せられた瞬間に、神に備わったお力より生じてくる。以上は形而上学的考察であるが、私の慎ましい思弁にはもう一つの道がある。それは、神が被造物に残された徴と自然の明白な力を辿ったり見出したりして満足を覚えることである。これらの神秘を深く探ったとしても、何の危険もあるはずがない。哲学に至聖所[4]は存在しないのだ。この世界が創られたのは、獣たちにとっては棲みかとなるためであったが、私たち人間にとっては研究と考察の対象としてであった。これは理性を神に負っているからであり、私たちは獣でなかったことに感謝し、神に敬意を表わさなければならない。理性がなければ、世界は未だ存在しなかったも同然であったろうし、あるいは、世界があると考えたり話したりする被造物の生まれなかった天地創造の第六日以前のままであったに違いない。辺りを闇雲に眺め、この上なく粗野なことばで神の御業を褒めそやす類いの愚かな頭の持ち主に、神の叡智を賞賛出来るはずがあろうか。神の行為を正しく探求し、被造物を慎

重に検証することを通し、敬虔にして学識溢れる賛美を捧げるという責務を果たす者こそ、みごとに神の栄光を称えるのである。だからこそ、

真理を救出せんと思わば、探し求めよ、
また、理性を向かわしめよ、いと深き淵までも。
散逸せし因果を再び呼び集めよ、そのとき、
自然のより合わせしあの糸もほぐれよう。
理性の他に神を知るはなく、これぞ
汝が創り主のご意思なり。
神よ、彼ら呪われの星々たる悪魔らは、御身を知りながら、
御身の栄光を築かず、御身の創り給いしものを惑わすばかり。
我が努力を導き給え。御身の御業を読み、学び、
御身のうちに進み行くことの叶うべく。
我が理性をかの学びの途へ翔び立たせ給え、
その疲れし翼、御身の御手に休らわん。
高く舞い翔ぶ術を教え給え。されど、
太陽に近づかば、再び低く降させ給え。(5)
我がつましき翼、傷一つなく空に浮き、
地に向かうおり、天空に劣らず多くを見出さん。
ついに家路へ急ぐとき、
自然の獲物あまた巣へと持ち帰らん。
されば座し、勤勉なる蜜蜂の如くなりて、
御身を称える羽音の絶えることなし。

死の不意に遮るその日まで。次いで来れる栄光は、
我に命じて永久の話を言わしめん。

ささやかな一個の被造物が神に応じ、幾許かでも報いるよう努力出来る術は、殆どこれしかあり得ない。「主よ、主よ」と唱える者ではなく、「御父の御心を果たす者が救われる」(6)のならば、私たちの意思はまさに行為となるべきであり、胸の内も具体化されなければならないからである。さもなければ、敬虔な労苦の果てに墓に横たわるとき、私たちは不安の種を見出すばかりであろうし、最善の努力を払ったとしても、復活を希望するどころか、恐れを抱くことに終わりはしないか。

* 「汝自身を知れ」

(1) 『列王紀略上』三・一〇。

(2) 余りにも有名なことばであるが、ブラウンは同時代人の大半と変わらず、異教の神々を常にキリスト教の悪魔と結び付けている。なお、この神託については、第一部第四十六節や『伝染性謬見』一・一一でも言及されている。

(3) 『出エジプト記』三三・二三。

(4) ウルガタ訳聖書『出エジプト記』二六・三三―四を踏まえている。

(5) 明らかに、イーカロス神話を踏まえている。

(6) 『マタイ福音書』七・二一。

## 第十四節

万物の第一原因はただ一つで、第二原因は四つある。(1) 神のように

作用因を持たないものもあれば、天使のように質料因のないものもある。また、第一物質のように形相因のないものもある。だが、被造物であるか否かを問わず、あらゆる存在には目的因があり、その本質と作用の双方に関わる何らかの積極的な目的を持っている。私が自然界の事物を巡って探求を続けている理由はまさしく目的因にあり、これにこそ、神の摂理が懸かっているのである。この世界と種々の被造物のように、非常に美しく構築されたものを出現させるのは神の御技に他ならないが、予め定められた目的を持つ個々の存在のさまざまな営みは、神の叡智という宝庫に由来する。諸原因、自然、月と太陽の蝕の状況は、考察すべき対象として大いに優れている。だが、さらに深く探求し、どのような理由から神の摂理が月と太陽の運行を広大な円形軌道上に配され、互いに重なり合い遮り合うよう定められたのかについて思いを巡らすのは、理性のより甘美な課題であり、哲学の神聖な要点である。従って、時には、また述べられている事柄によっては、ガレーノスの『人体各部の有用性について』がスアレース[2]の『形而上学』に劣らず、神学の要素を孕んでいると思われたりする場合がある。アリストテレースが他の原因の場合と同様に、この目的因の探求にも熱意を持っていたとしたら、彼は不完全な哲学の一編ではなく、完璧な神学の論考を残したことであろう。

（1）以下に列挙されている通り、作用因（動力因）、質料因、形相因、目的因をいう。

（2）スコラ哲学最後の碩学と称されたスペインのイエズス会士（一五四八―一六一七）。この著作では、自然神学、アリストテレースに由来する諸問題などが論じられているという。



## 第十五節

「自然は一切無駄を行なわない」[1]とは、哲学において唯一議論の余地のない公理である。自然界にはグロテスク模様[2]は存在しない。また、虚ろな一隅や無用の空間を満たすために作られたものは何もない。不完全この上なく、箱船にも収められなかった生き物は自然の胎内にその種子と根源を持ち、太陽の力が及びさえすればどこにでも存在する。[3]ただ、そのような類いにあってさえ、神の御手の叡智は見出せるし、ソロモンもそうした中から賞賛すべき対象を選んでいる。[4]実際、知恵を求めて、蜜蜂、蟻、蜘[5]に学ぼうとしない理性の持ち主がいるであろうか。理性が私たち人間に教えられなかったことを彼らに教えたのは、一体どのような優れた手であったのか。粗雑な頭脳の持ち主は、自然の途方もない作品と言うべき鯨、象、一瘤駱駝、二瘤駱駝に呆然とする。これらが自然の手になる巨大かつ壮大な代物であることは私も認めたい。だが、微細な仕組みにはより精緻な数学が含まれており、小さな市民たちの共同体は創造主の叡智をより的確に示している。レギオ＝モンターヌス[6]の鷲よりも、やはり彼の作った蝿の方を賞賛しない者がいるであろうか。また、杉の幹に宿る一個の魂にもまして、それらの小さな体内に宿る二つの魂[7]の作用に驚嘆しない者がいるであろうか。私は、海の干満、ナイルの増水[8]、北を指す磁針[9]といった、広く知られる驚異を思うだけ

では満足出来なかった。だからこそ、それらに匹敵するほどの驚異を、より明白でありながら顧みられることのなかった自然界の事物に求めつつ、研鑽に励んできたのである。遠くへ旅をするまでもなく、自らの宇宙誌に基いて行なえば事は足りる。外界に探し求める驚異は私たち自身の内に備わっている。私たちには、アフリカとその驚異がことごとく潜んでいるのだ。私たちは自然の大胆かつ冒険心に満ちた作品であり、自らを賢く学ぼうとする者は、他の人々が個々の事象や果てしもない大著から読み取ろうと苦労してきたことの概要を知り得るに違いない。

(1) アリストテレース『動物部分論』三・一など。
(2) 古代ローマの装飾様式。唐草模様の中に、人間、動物、果実、草花、武器などがあしらわれている。
(3) 蝿などの小動物は、腐敗した物質に働きかける太陽の力によって自然に発生すると広く信じられていた。
(4) 『箴言』六・六―八。
(5) 蟻は『箴言』六・六―八、三〇・二五で述べられている。蜜蜂については、七十人訳聖書の同三〇・二七に従っているらしい。蜘蛛は『欽定訳聖書』の同三〇・二八に出てくるが、ギリシャ語訳、ウルガタ訳聖書などでは、蜘蛛ではなく、やもりとされている。
(6) ケーニヒスベルクのヨハン・ミュラー（一四三六―七六）のこと。彼は鉄の蝿と木の鷲を作って、飛ばしてみせたという。
(7) 第十二節訳註3を参照。ブラウンはスコラ哲学の区分した、植物的生命、感覚的生命、理性的生命を踏まえている。植物が植物的生命だけを持つのに対し、動物は植物的生命と感覚的生命を持っていると考えられていた。三つを兼ね備えているのは、言うまでもなく人間である。
(8) これについては、『伝染性謬見』六・八でも論じられている。
(9) これについても、同じく『伝染性謬見』二・二、三で論じられている。

## 第十六節

以上の通り、私は二冊の書物を拠りどころとして神性についての推論を行なっている。一つは神のことばが記された書であり、もう一つは神の僕たる自然の書、即ち万人の眼前で展開され、広く知れ渡ったあの普遍の写本である。前者に神を見なくとも、後者で神を見出した者がいる。自然の書は異教徒にとって、聖書かつ神学の書そのものであった。イスラエルの子らが太陽の超自然的な位置に驚嘆したのにもまして、異教徒は太陽の自然の動きを賞賛している。[1] 彼らは自然の行なう通常の作用を称えているが、それには、他の人々が神のあらゆる奇跡に対して賛嘆の念を覚える事態を凌ぐものがある。確かに異教徒は、私たちキリスト教徒以上に、これらの神秘的な文字を繋ぎ合わせ判読する術を心得ている。私たちは、全世界に共通するこれらの象形文字を何気なく眺めるだけで、自然の花々から神性を吸収することを侮っている。私自身は、自然という名称を称えているからといって、神を忘れてしまった訳ではない。私は、学者たちに倣って自然を運動と休止の原理[2]として定義するつもりはなく、むしろ真っ直ぐな線、即ち神の叡智が被造物の行為をそれぞれの種に応じてお決めになる際の、一定不変の道筋だと考えている。日々回転するのが、太陽の属性である。最初に動けと命じられた声の働きによる以外に、太陽は神の定められた必然の軌道から逸脱す

ることが出来ないからである。さて、神がこの軌道を変更されたり歪めたりされることは殆どない。優れた芸術家よろしく工夫を凝らされたからには、新たな被造物をお創りになるまでもなく、常に同一の道具によって人知の及ばぬ構想を実現されるのである。このようにして、神は一本の木をもって水を甘くされ[3]、また、その口からの一息で容易にお創りになれるほどの生き物を箱船にお乗せになられたのであった。卓越した幾何学者は直線を引いたり分割したりする際に、コンパスの一振りでたやすく行なえるにも拘らず、既に体系化された自らの技法の原則に従い、円を用いたより複雑な手法でそれをやってのけるというが、神もこれに似ておいでになる。[4]だが、神は、ときとしてご自身の法則を歪められることで、人間にご自身の優位をお教えになり、私たちの理性が傲慢にも神の力を問題とし、神には自然の法則を変えることが出来ないといった結論を下すのを抑えておられる。かくして私は自然の作用を神の御業と呼び、自然が神の御手の道具に過ぎないと考えている。神の御業を自然に帰するのは、第一の動作主の名誉をその道具に与えるのに等しいのではないか。これが理屈に合うのならば、槌が起き上がり、家を建てたのは自分だと自慢したり、筆が著述の誉れを受ける事態を迎えるであろう。私の思うところでは、神の御業には遍く美が存在し、たとえどのような種の被造物であれ、醜悪なものはあり得ない。いかなる論理によって蟇、熊、象を醜いと言えるのか、私には理解し難い。これらは創造の際に、内なる形の働きを最も良く表わすべき外観を授けられており、遍く神の訪れのあることを伝えている。神は、ご自身のお創りになられたものがことごとく善だと考えておられる。



即ち、これらの生き物も、醜悪さをお嫌いになる神意、即ち秩序と美の規範に適っているのである。奇形における以外に醜悪さは存在しない。しかしながら、奇形においてすら、ある種の美は認められる。自然が奇異な細部に非常に巧妙な工夫を凝らしたため、ときとしてそれが本体の構造以上に注目を浴びることもある。さらに細かく言えば、混沌以外に醜悪なものや不出来なものはあり得ない。だが、厳密に考えれば、混沌においてさえ奇形は存在しない。混沌には形がなく、未だ神のお声によって形が孕まされてはいないからである。さて、自然は技巧と争ってはおらず、技巧も自然に逆らってはいない。両者は共に神の摂理の僕である。技巧は自然の完成した姿に他ならない。世界が天地創造の第六日目のままであったならば、未だに混沌が続いていよう。自然が一つの世界を作り、技巧がもう一つの世界を作ったのだ。要するに、自然も神の御業[5]であるがゆえに、万物は技巧の所産なのである。

(1) 『ヨシュア記』一〇・一二―二。これについては、第二十九節でも言及されている。
(2) アリストテレース『自然学』二・一。
(3) 『出エジプト記』一五・二五。
(4) プルータルコス『饗宴』八・二には、「神は絶えず幾何学に励んでこられた」という、プラトーンの発言が記されている。
(5) ホッブス『リヴァイアサン』（一六五一）序文の冒頭と酷似している。

## 第十七節

以上が万人に開かれた神の摂理の常道であり、人間の技術と勤勉はそのかなりの部分を見出してきている。神の摂理の結果を予測するに当たり、私たちは神託を必要としない。それを前もって判断するのは、預言ではなく予知と言うべきであろう。神の摂理にはもう一つの、迷路さながらに錯綜した道があり、悪魔や天使でさえ、それを読み解くための正確な天体暦を持ち合わせてはいない。しかもそれは、神が個々の人間や被造物の行為を導くためにお取りになる、より個別的で意味の捉え難い手段なのである。これを私たちは運命と呼ぶ。運命という、蛇のように曲がりくねった線によって、神はご自身の叡智がお図りになられた御業を人知の及ばぬほど密やかに実現されるのである。私は神が摂理をお示しになるこの複雑に入り組んだ手法を賞賛してきたし、私自身の来歴、日々の出来事、危険から免れたこと、あるいは好機に恵まれたことなどを語る際に、ただ運命に向かって「御手に接吻を」と言ったり、良い星の巡り合わせに対して単に感謝の念を捧げたりするだけで済ますことは出来ない。アブラハムは、牡羊がたまたま茂みに入り込んだ[1]と考えたかもしれない。人間の理性からすれば、箱舟に乗せられたモーセがパロの娘の見るところに辿り着いた[2]のは単なる偶然に過ぎないと思われたであろう。だが、ヨセフにまつわる話[3]は迷路のように入り組み、ストア派を改宗させるに足りるほどの子細が秘められているのではないか。[4]確かに、個々の人生には困苦、激変、激動があり、それは偶然のなせる業として当面は通用するかもしれないが、よくよく検証してみれば、結局神の御手の働きに他ならないことが判明するであろう。火薬陰謀事件を暴くために、書状に関する手違い[5]を画策したのは物言わぬ偶然ではなかったはずだ。私は八十八年の勝利をめでたいと思っている。敵が我が国の不名誉であり運命の依怙贔屓だとする一つの事件、即ち嵐が起こり逆風が吹いたという事実があるからこそ、その思いは一層強くなるのである。無敵艦隊を派遣したのは人と戦うためであって風と戦うためではなかったとフェリペ王が述べたとき、そのことばは彼の国民の名誉を貶めるものではなかった。相対する両者に明らかな勢力の不均衡がある場合には、理性の公理により、私たちは優勢な側が勝利を収めるであろうと判断する。だが、不測の出来事が生じ、思いもよらぬ事態が介入すれば、それは公理などに従わない力から発したものに違いない。その際には、あの壁に書かれた文字[6]と同じで、私たちは手を見ることは出来ても、それを動かす源を知ることは出来ない。オランダという取るに足らぬ小国が成功を収めた[7]のを（トルコの大守は、オランダ人がスペイン人に対したのと同様に自分を悩ませるなら、シャベルと鶴嘴を持った軍勢を派遣し、国ごと海に投げ込ませてやると豪語したらしい）、私は国民が利発で勤勉であるからだとは思わない。むしろ、繁栄をもたらす守護天使に彼らを委ねられた神の慈悲と、予め定められた時節にそれぞれの国に対して恩寵を賜る神の摂理のご意思によるものと言うべきであろう。あらゆる国が一時に幸福になれるのではない。一国の栄華は他国の滅亡に由来しているし、強大な国力といえども激変や盛衰は免れ得ず、人の知性ではなく、神の御手に

よって動かされる運命の車輪の回転に従わざるを得ないからである。どの国であれ、予め定められた時宜に応じて頂点に達する。人間のみならず、全ての国家とこの世の一生は絶えず拡大し続ける螺旋形を辿るのではなく、一個の円周を巡っている。一旦頂点に達すると、傾いて闇に入り、再び地平線の下へ沈んでいくのである。

（1）『創世記』二二・一三。
（2）『出エジプト記』二・五。
（3）『創世記』三七・二―五〇・二六。
（4）ちなみに、第二十節には、「ストア派の言う宿命的必然」とある。
（5）モンティーグル卿に宛てられた一六〇五年一〇月二六日付の匿名書簡により、議会爆破計画が未然に防がれた経緯を指している。
（6）『ダニエル書』五・五、二四。
（7）半世紀に及ぶ抗争を経て、オランダは一六〇九年にスペインから独立した。ただし、一六二二年に、両国は再び戦闘状態に入った。

## 第十八節

従って、上で述べた事柄をたとえ運命の作用と呼ぶにしても、それは自然の働きなどと言う場合と同様に、あくまでも相対的な意味で考えられるべきであろう。運命の作用といったことばを生み出し、しかもこの不正確な呼称を用いて神の摂理を侮辱したのは、人間の理性の無知であった。諸原因は束縛を一切受けないまま散漫に作用する自由を持ってはいないし、また、どのような結果であれ、必ず何らかの普遍的ないし至上の原因に根拠を与えられていなければならないのだ。賭博台を前にして祈りのことばを口にするのも、決して滑稽な信心ではない。籤占いを始め、大いに不確実と思われることでさえ、結果に至る動かし難い道筋が既に定められているからである。盲目なのは私たちであって、運命ではない。目が霞んでいる余り、運命の作用に潜む神秘を見過ごしたために、私たちは愚かにも運命を盲目として描き、全能なる神の摂理に目隠しを付けてしまっている。「幸運なのは愚者のみ」という軽蔑すべき諺や、「賢者は幸運の埒外」といった傲慢な逆説を正当化することは出来ないし、まして詩人たちの用いる「娼婦」、「淫売」、「女郎」といった破廉恥な形容語句[1]はなおさらである。世の常として、際だった精神的資質の持ち主が幸運に恵まれない運命にあるというのは認めざるを得ない。だからといって、それが賢明な判断をする人々の心を消沈させることにはならないのだ。彼らは、こうした成り行きの正しさを完全に理解し、より高貴な賜物に恵まれているからこそ、卑俗な部分には一層無頓着な目を向けるばかりである。全能なるお方の慈悲を独占しようと望んだり、優れた肉体や豊かな財産が得られないからといって、心という美点が与えられたことに満足を見出せなかったりするのは、紛れもなく不当な野心であろう。至福の付随的かつ周辺的部分のみを崇め、私たちが創造主に似ていることの根幹をなすべき完璧さや幸福の本質を低く見るのは、異端にもまして悪しき過ちである。幸運の恩恵を実際に享受出来なくとも、それに値するのを知るだけで、賢い人々の願いは十分に叶えられる。神の摂理が愚者に恵みを賜れんことを。生みの親として、神は分け隔てなく公平に私たちを扱われる。肉体と精神の能力に恵まれた者を、神はその

優れた能力に委ねられ、また、資質に乏しい者には多くをお与えになることで、一方の不足を他方の過剰で補っておいでになる。かくして、裸のままでおかれたからといって、また他の生き物の角、蹄、毛皮、殻を妬ましいからといって、私たちには自然と争ういわれはない。それら全てを補い得る理性が備わっているのだ。天体が人間に及ぼす影響を判断する星占いに対して、多くの論点を掲げ、反駁に努める必要はない。その占いに何らかの真理があったとすれば、それは別に神性を損なっている訳ではないからである。水星の下に生まれれば知恵を持ち、木星の下に生まれれば豊かになるからといって、それらの星に向かって跪く必要はない。取るに足らぬほどおぼつかないこの私が恵み溢れる星相に生を受けるよう定められた、慈悲深い御手に向かって跪くべきであろう。全てが運命に支配されていると考えていた者も、それだけに固執しなかったならば、過ちを犯さずに済んだであろう。ローマ人は運命に対して神殿を建立したが、かなり盲目的ではありながら、それに何らかの神性を認めていた。賢明な考察を行ないさえすれば、あらゆるものが全能なる神のうちに始まりと終わりを持つということを理解し得るからである。ホメーロスの鎖[2]よりも天に近い道がある。簡単な論理を踏まえれば、一つの論議で天と地を結び付けることも出来るし、連鎖推理を用いなくとも、全てを神に帰着させることが出来る。私たちキリスト教徒は感知し得る最も近い原因によって結果に名称を与えてはいるが、神こそが全ての結果をもたらす真のかつ無謬の原因である。神の御業は普遍であると同時に細分化され、あらゆるものの個別の行為へと通じている。まさに、それは個々の被造物を存立させるだけでなく、その営みをも成就させるべき精神と言わなければならない。

(1) よく知られた表現としては、例えば『ハムレット』二・二・五一五などがある。

(2) 『イーリアス』八・一八―二六。

## 第十九節

目に見える神の両手とも言うべき、対をなすこれらの第二原因[1]を巡る誤った解釈や邪な評釈は、多くの人々の信仰を歪めて無神論へと導いてきた。彼らは信仰の真摯な忠告を忘れ、情念と理性の共謀に耳を傾けたのであった。だとすれば、なおのこと私は感情、信仰、理性の不和と怒りに満ちた軋轢を宥めようと絶えず努力を重ねてきた。私たちの魂には一種の三頭政治、即ち三人の競争相手による三重の政府があり、それがあのローマという国に劣らず、私たちという共和国の平和を乱しているからである。

理性は信仰に対して、また感情は理性に対して反旗を翻す。理性からすれば信仰の掲げるところが愚かしく思われてならないように、感情も理性の示す公理を一笑に付してしまう。同様に、理性と感情の両者は、信仰からは不条理だと思われている。だが、中庸かつ穏便な分別をもってすれば、毅然として事態に対処し、三者が王でありながら、単一の王政を敷くように命じることも可能であろう。おのおのが、状況の制約と限界に応じつつ、しかるべき時と場所に

おいて各自の主権と大権を行使するのである。哲学の場合と変わらず、神学にも根強い懐疑や騒然とした異論があり、私たちは不幸にも自らの知識によって、この事実を痛切に思い知らされている。それを私以上にわきまえている者は他にあるまい。告白するが、私は好戦的な姿勢を取らず、ひたすら神に跪きながら、こうした懐疑や異論を克服した。私たちは懐疑と闘うのみならず、常に悪魔とも論戦を交えるよう努めなければならないからである。あの邪悪な天使は私たちの研鑽に不信心の兆しを嗅ぎ取ると、一方で自然の推移と符合する点を示しつつ、他方で奇跡に対する私たちの疑念を醸し出そうとする。かくして悪魔は『秘法』[2]を吟味し、事物の密かな感応力を読み取った上で、真鍮の蛇[3]に寄せた私の信心を説き伏せようとした。即ち、その蛇の像には感応力が作用しただけであり、奇跡ではなく、病を癒すというエジプトの治療術に過ぎないと思い込ませようとしたのであった。さらに、瀝青に関する実験を目にし、揮発油についてもかなりの知識を得ると、悪魔は、祭壇の火がともった[4]のも自然のなりゆきではないかと私の好奇心に囁きかけ、エリアが祭壇の周囲に掘った溝に水を満たして行なった奇跡[5]を信じてはならないと命じてきた。あの不燃性の物質は容易に水に溶けるものではなく、むしろ敵対する性質を持つ要素の力を得て燃え盛るというのである。同様に、彼は私の信仰を欺いて、ソドム[6]を燃え上がらせたのは自然の火であり、ゴモラの大火以前にその湖がアスファルトと瀝青の性質を帯びていたなどと信じ込ませようとした。私は、カラブリアでは今もマナが豊富に集められているのを知っているし、ヨセフス[7]によれば、彼の生きた時代にもアラビアではマナが豊富であったという。すると悪魔は問いを発し、モーセの時代に奇跡はどこにあったのか、当時イスラエル人が見たのは、今日その地に住む民族が見るのと同じものではなかったかと言った。かくして悪魔は私にチェスの勝負を挑み、ポーンを渡しながら、私の真摯な努力につけ込んで、クィーンを狙ってきた。私が理性の構築に忙しく取り組んでいていた隙に、彼は私の信仰の館を覆そうと躍起になっていたのだ。



（1）運命と摂理とを指して、こう呼んでいる。
（2）一五二六年頃に書かれた、パラケルススの著作。
（3）『民数紀略』二一・九。
（4）『レビ記』六・一三、『マカバイ記下』一・一九―二六。
（5）『列王紀略上』一八・三五―八。
（6）『創世記』一九・二四―八。なお、『伝染性謬見』七・一五には、アスファルトの性質を帯びた湖に関する議論がある。
（7）ユダヤの歴史家（三八頃―一〇〇頃）。該当箇所は『ユダヤ故事』三・一・六。

## 第二十節

以上の事柄やその類いは、私を不信心ないし無神論という絶望的な立場に傾かせるほどの働きを示さなかった。長年にわたり、私は無神論などというものは存在したはずがないと考えていたからである。宗教によって人間は獣と分かたれると考えた者は、恐らく他に劣らぬほどの説得力を持つ原理に基いて発言し、論を進めてきたの

ではなかったか。エピクーロスの説でさえ、神の摂理を否定してはいるものの、無神論ではなく、むしろ神の威厳に関する途方もなく壮大な概念を敢えて思い描いたものに他ならない。彼は、神が余りにも崇高で、取るに足らぬ被造物の些細な行為には配慮なさらないと見做したのである。また、ストア派の言う宿命的必然は、神意の不変の法則に他ならなかった。従来、聖霊の神性を否定した人々は異端宣告を受けてきた。また今日、私たちの救世主を否定する者も[1]（異端に留まらないとはいえ）無神論者とまでは言えない。彼らは三位一体の二つの位格を否定こそしてはいるが、私たちと同様に、唯一の神が存在すると考えているのだ。

三人の詐欺師にまつわる邪悪な書[2]を著した、あの地獄の書記と言うべき悪漢は、あらゆる宗教から排除され、しかもユダヤ人、トルコ人、キリスト教徒のいずれでもないが、それでもなお断固とした無神論者ではあり得ない。どの国にもマキャヴェリがおり、いつの時代にもルーキアーノス[3]がいるのではないか。凡人は彼らの話を聞くべきではないし、優れた判断力の持ち主でさえ、性急にそれを信じて事を起こすべきではない。それは悪魔の弁舌さわやかな修辞であり、未熟でおぼつかない信仰心を邪道に陥らせるかもしれないのである。

（1）一六世紀のイタリアに起こったソッツィーニ主義を指していると思われる。

（2）三人の詐欺師（モーセ、キリスト、マホメット）を論じた、匿名の著者による書物が存在すると、当時広く信じられていたらしい。

（3）諷刺精神に富むギリシャの散文作家（紀元前一二〇頃―九五頃）。

## 第二十一節

私は彼らの著した書物を全て通読したが、思慮深い信仰を揺るがすようなものは何も見出せなかった。だが、中には、そのような書物の論議の風や息に煽られて道を踏み外した者もいる。私は、あるイタリアの医学博士を覚えている。彼は、ガレーノスが疑問を差し挟んでいるらしいという理由から、魂の不滅を自分でも完全に信じることが出来なかった。また、フランスで私と親交の厚かった人物がいる。彼は神学者として卓越した才能を持っていたが、医学博士の場合と同じ点で、セネカの三行[*1]に著しく惑わされた結果、聖書と哲学に基いたいかなる解毒剤をもってしても、その誤謬という毒を消し去ることが不可能であった。水夫の話を信用しながら、聖パウロの証言は疑うような人々がいる。アエリアーヌス[2]やプリーニウスの伝える事柄を即座に支持するものの、聖書の物語には問いを発し、異議を申し立て、それと対応する例を古典の著作に見出せない限りは一切信じようとしない人々もいる。確かに、聖書には詩人たちの語る寓話を凌ぐ物語があるし、詮索好きな読者には、ガルガンチュアやベヴィス[3]の類いに等しいと思われるものがあるかもしれない。過去の伝承や現在の空想綺譚を渉猟したとしても、サムソンに匹敵する話を見出すのは至難の技であろう。だが、全能なる神の小指から発せられるお力を考えれば、サムソンの物語[4]は大いにあり得るはずだと容易に察しがつくのではないか。人間の談話であれ神の無謬

のお声であれ、私たちの乏しい理解力からすれば、不整合、矛盾、二律背反の生じないことはない。私自身、これまで想定もされず問題にもされなかったと思われる疑問を一覧表にして示すことが出来る。それらは、聞けばすぐに解決するものでもなければ、的はずれの問いでも、空気のように実体のない異論でもないに違いない。こと神性に関する限り、些細な事柄として済まされるような話を私は聞いたためしがないからである。私は、箱舟から放たれたまま戻ってこなかった鳩の話[5]を読んでも、その鳩が後に残された連れ合いとどのように出会ったかを尋ねるつもりはない。ラザロは[6]死者の中から甦ったが、その間、彼の魂はどこで待っていたのかを詰問したりはしない。また、ラザロの死によって遺贈された財産を相続人が正当に保有する権利を留めているか否かについて、また、たとえ甦ったからといって、ラザロにはかつての財産を所有すべき正当な権利を訴えることが出来ないのではないかといった件についても、敢えて法律を持ち出すつもりはない。エヴァがアダムの左側から創られたか否か[7]について論じようとも思わない。未だにいずれが人間の右側であるかを、また、自然には果たして左右の区別があるのか否かを確信出来ないでいるからである。[8]私はエヴァがアダムの肋骨から創られたことを信じてはいるものの、復活の際、その肋骨を抱いて起き上がるのは誰かを問いただしたりはしない。ユダヤの律法学者が聖書の字句[9]に基いて論争していることではあるが、私はアダムが両性具有であったか否かを問題にしたいとは思わない。女の存在する以前に両性具有があったとか、第二の性質が形成される以前に二つの性質の結合したものが存在したとかいうのは、理に反するから



である。同様に、世界が創られたのは、秋、夏、春のいずれかなども問題にするつもりはない。世界はそれら全ての季節の下で創られたからである。太陽が黄道宮のどこに位置を占めていようと、四季は現実に存在している。一年の四季を分かつのは、この太陽という発光体の属性である。太陽は、地球全土に四季の全てを一時に出現させ、どの地域であれ季節の推移を絶やしはしない。[10]哲学に限らず神学にも、こうした微妙な論議を必要とする問題が山ほどあり、非常に有能だと目されている人々がそれを提起し、論じ合っている。だが、そのようなことは私たちの暇な時間を費やすに値しないはずであるし、まして真摯な研究の対象とはなり得ない。もっぱらパンタグリュエルの書庫[*11]に収められたり、タルタレトスの『排泄論』[12]と共に括られるのがふさわしいのではないか。

* 「死後には何もなく、死それ自体も無。
死は分け隔てなく肉体を滅ぼし、魂をも容赦せず――
全てが死滅し、何も残らず――」
ラブレーにおいて。

(1) セネカ『トロイアの女たち』三九七、四〇一―二、三七八九の引用。ちなみに、ブラウンの同時代人ロチェスター伯は、『トロイアの女たち』三九七―四〇八を模した詩を残している。
(2) 三世紀頃のローマの歴史家。
(3) 一四世紀の冒険譚『ハンプトンのサー・ベヴィス』の主人公。
(4) 『士師記』一四・五―一六・三〇。
(5) 『創世記』八・一二。
(6) 『ヨハネ福音書』一一・四四。

(7) 『創世記』二・二一―二。
(8) これについては、『伝染性謬見』四・五で論じられている。
(9) 『創世記』一・二七。
(10) これについては、『伝染性謬見』六・二で論じられている。
(11) ガルガンテュアの見た、サン・ヴィクトル修道院の書庫（ラブレー、二・七）。
(12) 前註の書庫の目録二五番に記載された架空の書物。ただし、タルタレトスは実在していた。

## 第二十二節

これらは、重大な神秘を詳しく探ろうとする者にはふさわしくない瑣末な事柄である。他にも広く問題とされ、論議の対象となっているものもあるが、私から見れば、それらはむしろ容易に理解出来る真実である可能性が高いのではないか。ノアの大洪水をより後代の出来事と見做したり、あの特定の地域で生じたに過ぎないデウカリオンの洪水[1]にかき消されてしまうほどの規模であったなどと考えたりするのは滑稽なことである。かつて大洪水があったというのは、全く洪水がなかったということと較べれば、それほどの奇跡ではないように思われる。あらゆる種類の生き物が、それら自身の嵩に加え、十分な食料などと共に長さ三百キュビトの箱舟[2]にどのように収められたのかというのも、理性を正しく働かせて考察すれば、大いに可能な事態であったと思われるのではないか。さらに、聖書にも記述のない謎がもう一つあって、その難解さの余り、あの尊敬すべき教父でさえ奇跡に逃げ道を求めて説明を施したほどであった[3]という。それは、世界の各地域や他から隔絶された島々にまず人間が住みついただけでなく、虎、豹、熊が入り込んだのはなぜかという問題である。猛獣や危害を及ぼす動物の溢れるアメリカに、人間に不可欠の馬という動物がいないのも大いに不思議なことに違いない。鳥だけでなく、危険かつ好ましからざる獣がどのような経路を辿って、その地に渡ってきたのか。どうしてアメリカにはこの三大大陸[4]に見られない生き物が生息しているのか。これら全ては、箱舟が一艘しかなく、生き物はどれもアララト山[5]から歩み出たと考える私たちからすれば、この上もなく奇妙な話に違いない。これを解明するために、大洪水が特定の地域に限られた出来事であったと主張する人々は、私には到底認められない原理を拠りどころとしている。彼らは、聖書[6]だけでなく私自身の理性をも否定する立場に基いているのだ。私は理性に従って、ノアの時代には現在と同じように多くの人が住んでいたと考えている。大洪水以後の四千年を経て今日の私たちがあるのと変わらず、それ以前の千五百年は世界を人で満たすには十分な時間であるはずだ。[7]他にも、聖書に起源を持ち、聖書同様に広く信じられている主義や見解がある。だが私は、これらに対して私の理性の自由を譲り渡そうとは思わない。アブラハムの子供のうちメトセラ[8]が最も長く生きたというのは、私にとっては根本原理であるが、誰もその真実を証明出来ないであろう。聖書の記述の筋道を踏まえれば、それとは異なる事態を導き出すことも私には可能である。[9]ユダが自ら首を吊って果てたということも聖書では断定されておらず、ただ、それを肯定しているように思われる一節があるに過ぎない。曖昧なことばが用いられているために、その箇所は

首を吊ったという解釈の生じる根拠となっているのだ。[10] だが、別の一節にはより詳細な記述があり、[11] その事態をあり得ないこととし、自殺説を覆していると考えられる。私たちの父祖が第二の大洪水を免れるために、大洪水の後でバベルの塔を建立したことは広く主張され、信じられてもいる。[12][13] だが、聖書には彼らのもう一つの意図が記されているし、[14] シナルの平野という場所の状況から判断しても、そのような説は成立しないと思われる。これらの問題は信仰に関わることではない以上、自由な論争が許される。他にも種々の疑問な点があり、通常は聖書から結論が導かれているものの、（失礼ながら）それらには何か意味があるなどとは思われない。ローマ教会は、守護天使が存在するという説を自信を持って証明するのに、ペテロが門を叩いたときに返ってきた「それはペテロではなく彼の天使であろう」[15] という答えを根拠とした。ところが、実は天使ではなく、彼の使者だとも、彼から遣わされた者だとも言えるのである。むしろ、それが原典の語義であり、判然とはしないまでも召使の意味である可能性が高い。かつて、公式の場でこの問題に答を出そうとした若い神学者に向かって、私は以上の解釈を提示したことがあった。すると、そのフランチェスコ派の論敵は新奇で根拠のない解釈だと言うだけで、それ以上は一切応じようとしなかった。

（1）オウィディウス『変身譚』一・三二五。
（2）『創世記』六・一四―二二。
（3）アウグスティヌス『神の国』一六・七。
（4）ヨーロッパ、アフリカ、アジアを指す。
（5）『創世記』八・四。
（6）同書七・一九―二〇。
（7）これについては、『伝染性謬見』六・六で論じられている。
（8）『創世記』五・二七。
（9）これについては、『伝染性謬見』七・三で論じられている。
（10）『マタイ福音書』二七・五。
（11）『使徒行伝』一・一八。これについては、『伝染性謬見』七・一一で論じられている。
（12）これについても、同じく『伝染性謬見』七・六で論じられている。
（13）ヨセフス『ユダヤ故事』一・四・二。
（14）『創世記』一一・四。
（15）『使徒行伝』一二・一五。

## 第二十三節

以上は全て、神のことばに対して人間の下した結論であり、その論議は誤りを免れはしない。私は、聖書が神のことばであると信じている。だが、仮に人間のことばであったとしても、それは天地創造以来、比類のない至上の一篇だと言わざるを得ない。私が異教徒であったとしても、聖書を精読するのを差し控えるべきではあるまい。また、この一書がなければ己の書庫が完璧にはならないとしたプトレマイオス[1]の判断を賞賛するばかりである。（偏見を交えずに言えば）トルコ人のコーランは出来の悪い一篇で、哲学の空しく滑稽な過ち、笑止千万な不可能事、虚構、虚飾が含まれており、それらが、一目瞭然たる詭弁、無知に基づく方針、学究の場の廃棄、学問

の追放によって支えられているのである。コーランが武力と暴力によって地歩を固めたのに対し、聖書は力に訴えることなく、地上全土に広まっていった。フィロンが[2]初めて述べた、モーセの律法はいささかの修正も加えられないまま二千年も続いたということばは注目に値する。だが、周知のように、他の国々の法律は時宜に応じて変更され、起源を何らかの神に持つと誇らしく喧伝されたものでさえ、跡形もなく消え去り、記憶にも留まりはしない。私は、ゾロアストル[3]に加え、モーセ以前に書を著したさまざまな人物がいた[4]と信じている。とはいえ、彼らは時という万人に共通する運命に従ったのだ。人間の著作は著者と同じように齢を重ねていく。また、たとえ著者よりもながらえたとしても、その歳月には何らかの限りがある。時の牙に強固に立ち向かえる書物は、聖書をおいて他にない。聖書は、万物が最後の劫火に包まれ、灰にその名残を留めるまで、決して滅びはしないのである。

(1) エジプト王プトレマイオス二世は（紀元前二八三―四六）は、七十人訳聖書を作らせた人物として知られている。
(2) ユダヤの思想家（紀元前二〇頃―五〇）。該当箇所は『モーセ伝』二・三であるらしい。
(3) 『創世記』の注釈者たちからは、モーセが最初の著作家であると信じられていたが、プルータルコスの『イシスとオシリス』には、ゾロアストルがトロイ戦争の五千年前に生きていたという記述があるらしい。
(4) アウグスティヌス『神の国』一五・二三。

## 第二十四節

人々がキケロの失われた詩行を思って、深い溜め息をつきながら嘆き悲しむのを、また、アレクサンドレイアの図書館の炎上[1]を幾度となく呻き声を上げて悔やむのを、私は耳にしたことがある。私自身としては、世間にはそのような人々が多過ぎると思っている。私ならば、ごく少数の人々と協力して、ソロモンの消滅した著作[2]を復元出来さえすれば、ヴァティカンが灰となり壷に納められるのを目撃したとしても、それに耐えられるであろう。だが、エノクの柱[3]の拓本をないがしろにする訳にはいかない。たとえヨセフス以上に、その柱にまつわる詳細を残した多くの著作家があり、しかも、その記すところが寓話らしい趣を呈していなかったとしてもである。他の人々が語った事柄より以上に多くを著した者がいる。ピネーダ[*4]が一篇の著書で引用した作家の数は、世界が必要としている数を遙かに超えている。ドイツにおける三大発明[5]のうち、二つには不都合な点がない訳ではないし、それが効用と便利さを凌いでいるか否かについても議論の余地がある。一大教会会議があればと願うのは、単に私自身の物狂おしい切望に留まらず、より賢明な人々も望むところである。それは、信仰の相容れない違いを一致させるのではなく、学問の便宜を目的とする。即ち、学問を原初の、信頼に足る少数の著作家におけるような姿に戻し、何百万という有象無象の熱狂的な言辞に火刑宣告を下すのである。そのような言辞は、判断の脆弱な学徒を困惑させ欺くために、あるいは、印刷工の商売と怪しげな技

術を支えるために生み出されただけではないか。[6]

＊　ピネーダは、『教会論』で一千四十人の著者を引用している。

(1)　プトレマイオス王朝下の膨大な書籍を収めたアレクサンドレイア図書館は、大小二つあった。大図書館は紀元前四七年、カエサル侵攻の際に炎上し、小図書館は四世紀にキリスト教徒、六四〇年にイスラム教徒によって、破壊された。

(2)　『列王紀略上』四・三二―三、ヨセフス『ユダヤ故事』八・二・五。

(3)　エノクの時代までに成し遂げられた発明や発見の記録が刻まれているという柱。ヨセフス『ユダヤ故事』一・二・三は、それがセツの子孫によって作られたものであり、大洪水をも免れたとしている。ちなみに、アイザック・ウォルトン『釣魚大全』（一六五三）一・一でも、エノクの柱が話題とされている。

(4)　スペイン生れのイエズス会士（一五九七―一六三七）。

(5)　不詳ではあるが、印刷術、鉄砲、羅針盤ないし時計のことを指すのではないかと思われる。

(6)　「読者諸賢へ」で述べられたのと同質の心情を伝えている。

## 第二十五節

サマリヤ人がモーセ五書に限って信仰していたのは、旧約に収められた他の書にどのような異論を抱いていたからであろうか。私には奇異に思われてならない。旧約に関するユダヤの律法学者の解釈は、彼らが新約に背を向けた事実に劣らず、何とも恥ずべきことではないか。ヤコブのあの堕落した軽蔑すべき子孫には、呆れ果ててしまう。かつて彼らは異教徒の迷信を熱烈に信奉し、隣人たちの偶像崇拝にやすやすと引きつけられていたはずなのに、今や頑迷かつ独断的な信仰心から彼ら自身の教義に固執している。しかも、彼らは不可能なことを期待し、改宗の希望を全く抱かないままキリスト教会と正面から対峙し続けている。彼らの姿勢は悪徳に他ならないが、自らの教義に従うことは、私たちにおいては美徳だと言わなければならない。悪しき大義に頑なであるというのは、善なる大義にあっては志操堅固を意味するからである。私が私たち自身の宗教を信じる人々を責めなければならない根拠は、まさにこの点にある。キリスト教徒として、かりそめの信心やおぼつかない信仰があってはならないのだ。しばしば変節を繰り返したあげく、同一の種と言えるキリスト教の各宗派ではなく、ユダヤ教やマホメット教といった、より邪悪で、しかもキリスト教に対立する宗教に従うことなど許されるはずがない。そのような宗教にあっては、救世主の御名が単なる預言者という語に貶められている。また、彼は来たれりという古い信仰が、彼は来られるであろうという新たな期待に堕している。キリストは、私たち全ての人類を一つの群れにすると約束された。[1] だが、それがいつ、どのように実現するかは、最後の審判の日と同じく、私には不明である。四つの宗教[2]の信者のうち、私たちの数は僅かである。確かに新たに加わる者もいるにはいるが、私たちの敵に加担する者と較べれば少数でしかなく、それも己の宗教に反乱を企てた異教徒の中から生じたに過ぎない。即ち、消極的な不敬の念を持っていた者、またキリストについて聞いたことがなかったために、彼を拒んでいた者だけなのである。だが、ユダヤ教は公然とキリスト教に敵対し、イスラム教はこの両者に敵対している。現

在の強大な数を考えれば、トルコ人が改宗することなど望むべくもない。彼らが分裂すればその期待を抱けるかもしれないが、逆の可能性も高くない訳ではない。ユダヤ人はどのような運命に遭遇しても頑なであった。千五百年にも及ぶ迫害は、彼らの誤った信仰を堅固なものにしたに過ぎなかった。彼らは既にありとあらゆる苦難に耐え、悪しき大義を抱きつつ己の境遇を甘受し、迫害を続ける敵に不面目な思いを痛感させたほどであった。迫害は宗教を植え付ける際の、悪しき間接的な手段である。怒り溢れる信心が用いたこの不幸な手段は、真摯な信仰だけでなく邪悪な異端をも堅固にするだけでしかなかった。迫害を受けることは、私たちの信仰の最初の礎石かつ土台となった。私たち以外には誰も、迫害と殉教者の数及び勇気という栄光とを正当に誇れる者はいない。適切な言い方をすれば、迫害と殉教こそが堅忍のありかを示すべき、真実の、かつ殆ど唯一の手本であろう。戦場や陣地の作戦行動で活躍した者に範を求めたとしても、彼らは豪胆ではあるかもしれないが、必ずしも真の勇気を示す例とはなり得ない。せいぜいのところで、素性のいかがわしい堅固さの類いを保持しているだけに過ぎないのではないか。アリストテレースの言う、真の完璧な勇気に必要な状況と条件[3]を厳密に検証すれば、唯一これにふさわしいのは彼の主君アレクサンドロスに他ならず、かろうじてその資格があると思われるのはローマの偉人ユリウス・カエサルだけであろう。また、仮に容易で積極的な手段によって、勇気という名に値するほどの高貴な働きを示し得るのであれば、より苛酷な状況で受け身に徹した場合の方が、これを遙かに凌ぐはずであるし、英雄としての名誉ある称号を戴く権利を主張出来るであろう。これほどまでの高みに登り、炎を潜って天に到達するのが、正直な信仰の持ち主全てに可能だとは限らない。誰もがそのような資質を存分に持ち合わせている訳ではないし、身の毛のよだつほど恐ろしい試練や責め苦に耐えるだけの豪胆で毅然とした気質に恵まれている訳でもない。とはいえ、誰しも、穏やかな方法で救世主を心から崇め、（疑いもなく）神の目に適う信仰を抱き得るのではないか。

（1）『ヨハネ福音書』一〇・一六。
（2）異教、ユダヤ教、イスラム教、キリスト教を指す。
（3）『ニコマコス倫理学』三・六―九。

## 第二十六節

さて、戦いで命を落とした者を全て兵士とは呼べないように、信仰に関わる事柄で受難した者を一様に殉教者と言うのは適切ではない。コンスタンツの公会議[1]はヤン・フスに異端宣告を下したが、彼に従う者たちの言い伝えでは、彼を殉教者だと称している。フスが異端でも殉教者でもないと言う者は、双方の側の神学者を怒らせるに違いない。（疑いもなく）地上で聖別されていながら、天上では聖人に加えられない者も多い。さらに、歴史や殉教者伝に名前が記されていながら、彼らは神の目から見れば、信仰の根幹であるはずの唯一絶対なる神を巡って命を賭した賢明なる異教徒ソークラテースほどには完璧な殉教者とは映らないはずである。私は常々、対蹠人

の存在を申し立てたために受難した哀れな司教[2]に同情を示してきた。だが、そのような些事のために生命を危険に晒した彼の狂気は、彼を断罪した人々の無知と愚かしい狂気に劣らず非難されなければならない。仮に私が、自分ほど気高く、死の顔を恐れない者は現存しないと言ったとしても、良心にもとる嘘をついたことにはならないのではないか。だが、神命に従うべき義務の念、また己の本質と存在の保持を尊重する生来の思いから、私は、儀礼、政治的問題、無意味な事柄などに殉じて死ぬつもりはない。また、障壁に対して屈することもなければ、不敬が明白には認められないほどの問題も黙許しないといった屈強な気質を、私の信仰は持ち合わせてはいない。従って、一市民としてのみならず信仰にまつわる行為全てを発酵させるパン種は知恵に他ならない。これを持たない限り、炎に身を委ねることは殺人行為そのものであり、（思うに）一つの炎を潜り抜けた後にもう一つへと入っていくことではないか。

（1）一四一四年に開かれたこの会議で、フスの火刑とウィクリフの著書の焼却が決定された。

（2）ザルツブルクの司教ウィルギリウス（七八〇没）。対蹠人の存在を主張するのは、もう一つの世界の存在を認めることに通じるとされていた。

## 第二十七節

奇跡が終焉したというのを私は証明も出来なければ、断固として否定することも出来はしない。まして、それが終わりを迎えた期日を特定することなど不可能な限りではないか。キリストの昇天以降も奇跡があったのは、聖書の記述[1]を踏まえれば明白である。しかも、使徒たちの死後も奇跡が生き延び、何年も経ってから諸民族の改宗したおりに再び起こったというのも、諸作家の証言を疑うのでなければ、否定のしようがない。彼らのことばに私たちの見解を支持する点があれば、それを論駁するべきではない。従って、インド諸島で奇跡を行なったとイエズス会士たちが伝えたことにも何らかの真実があるのかもしれない。私はそうであればと願っているし、彼ら自身の筆以外の証言が得られればと期待してもいる。目に見えるパンと葡萄酒が救世主の肉と血に変質するという偉大な奇跡を日々故郷で知る者は、異国にあっても、そのような奇跡を容易に信じるであろう。全質変化と較べれば、キリストがカナで水を葡萄酒に変えられたことや[2]、荒野で悪魔が彼に命じて石をパンに変えさせようとしたことなど[3]は奇跡という名に殆ど値しない。だが、正確に言えば、奇跡は全て神の御手の驚くべきお働きであるからには、奇跡の間に優劣は存在しない[4]。神の御手にとっては、全ては等しく容易なことであり、全世界を創造されるのも一個の生き物をお創りになるのと変わりはしない。自然に反したり、自然を超えたりする場合だけでなく、自然よりも先に結果を生み出すのも、やはり奇跡である。また、自然を創造するのも、自然と対立したり、自然を超越したりするのに劣らず、偉大なる奇跡となる。神のお力を私たちの理解の範囲内に留めようとするのは、余りにも了見の狭い定義であろう。私は、神が全能であられると考えている。相矛盾することをどのように行ないになられるのかは理解出来ないが、だからといってそれを

否定するつもりはない。神のお力の及ばないことだとすれば、なぜ神の御使いの天使がエズドラス[5]に過ぎ去った日々を呼び戻すようにと命じたのか、即ち、ご自身で行なわれないことをなぜ人間に課されたのであろうか。私は、神に不可能があるなどと言うつもりはない。私たち人間が神にはお出来にならないと断言して憚らない多くのことを、神はなさろうとお思いにならないだけなのである。このような言い方こそ最も礼に適うものだと私は確信しており、これに逆説などを込めるつもりは全くない。厳密な意味からしても、神のお力は御意思と同一であり、両者は他の一切と共に唯一絶対の神を成しているからである。

(1) 『使徒行伝』三・一六。
(2) 『ヨハネ福音書』二・一―一〇。
(3) 『マタイ福音書』四・三。
(4) アウグスティヌス『神の国』一〇・一二には、「この世でなされた全ての奇跡も、この世界それ自体という奇跡に劣る」とある。
(5) 『エズラ第二書』四・五。

## 第二十八節

だからこそ、私はかつて奇跡のあったことを信じるし、今生きている人々によって奇跡が行なわれ得ることも否定はしない。だが、死者の働きによる奇跡などというものを信用出来るはずがない。そのため、私は聖遺物が持つとされる霊力を疑い、遺骨を調べ、聖人の衣服や所持品に留まらず、キリスト自身のそれにも疑問を投げかけるのである。キリストがその上で亡くなられた十字架はヘレナ[1]によって発見されたというが、なぜそれに人を甦らせる力があるのか、私には理解出来ない。コンスタンティヌス帝が落馬を免れ、敵の危害から逃れたのも、十字架上の救世主の掌に打ち込まれた釘を馬勒に帯びていたからだとは、到底考えられない。イェルサレム王バルドウィン[2]が戦のおり、自軍に加わったジェノヴァ人の出費と労苦に対して報いた品、即ち洗礼者ヨハネの遺灰も、所詮は善意の偽りの類いに過ぎず、聖なる剣や薔薇と較べても格段に優るとは言えないのではないか。清らかな魂が亡骸に何らかの痕跡と聖なる力を残すと考える人々は、奇跡についていかにも自然に語りながら、疑念を晴らしてくれてはいない。さて、私が聖遺物に対して敬虔の念を殆ど示さない理由の一つは、自分には古の事物を尊重する意思が僅かしかなく、むしろ疑念を感じる方が強いことにあると思われる。私が心から称えるのは、古代よりも遙かに遠いもの、即ち永遠、とりもなおさず神ご自身だからである。神は日の老いたる者[3]と呼ばれるが、古さを表わす形容語句を受け入れたりはなさらない。神の存在は世界に先立ち、世界が終わる後もそれは続く。それでいて、神は世界よりも老いてはおられない。神の歳月に厄年はなく、存続期間は永遠であり、その古さにもまして大いに崇められてしかるべきなのである。

(1) コンスタンティヌス帝の母。聖地イェルサレム巡礼のおり、当該の十字架を発見したという。ヘレナについては、『ハイドリオタフィア』三でも触れ

られている。

(2) 第一次十字軍の結果、イェルサレムに建てられた王国の初代王（在位一一〇〇―一八）。

(3) 『ダニエル書』七・九。

## 第二十九節

だが、私にはとりわけ奇異に思われてならないことがある。詮索好きで賢明な人々がなぜ、神託の終焉[1]という、あの議論の余地のないほど偉大な奇跡を見逃しているのであろうか。しかも、プルータルコスの主張したこじつけまがいの滑稽な理由[2]に満足し、安閑としていられるのは、彼らの理性が失神状態にでも陥っているからなのか。ユダヤ人はヨシュアの時代に太陽が超自然的な至点にあったこと[3]を信じていながら、異教徒でさえ認めた、あのキリストの死に際して生じた日食[4]を恥知らずにも否定している。だが、この日食はどのような反駁も及ばぬほど明らかなことであり、悪魔自身でさえ、これを受け入れている。*[5] 確かに、聖書の真実を古典の歴史という索引に基いて検証したり、エステル書やダニエル書をメガステネース[6]やヘーロドトスなどの権威に従って確認しようとするのは、好ましい詮索の手段ではない。告白するが、私自身、こうした不幸な好奇心を抱いたものの、やがてユスティーヌス[7]の一篇を読んで大笑いし、過ちから逃れた経験がある。それには、イスラエルの子らが疥癬にかかったためにエジプトから追われたと書かれていたのである。この世の出来事を理解し、また、現在が紛い物の姿形と偽りの仮面の下で過去を再び舞台に登場させる次第を知ってからは、私は過去の事柄を未来のそれほどにも信じないようになった。私と同じ見解を持ち、自らの来歴を書き記すことに努めた人々がかつて存在していた。中でも、モーセは他から抜きん出ていたし[8]、己の生涯の記録のみならず、そう主張する者[9]もいるように、己の死をも後世に伝えたのであった。



* アウグスティヌスへの神託において。

(1) これについては、『伝染性謬見』七・一二で論じられている。

(2) その著作、『奇跡の終焉について』を指している。

(3) 『ヨシュア記』一〇・一三。

(4) 『ルカ福音書』二三・四四―五。

(5) これについては、『伝染性謬見』七・一二で具体的に紹介されている。

(6) 紀元前三世紀頃の歴史家。シリア王の命により、インドへ渡航し、後にインド史を著した。

(7) 不詳。しばしば殉教者ユスティーヌスと混同された、三世紀頃のローマの歴史家を指しているのかもしれない。

(8) 『申命記』三四・五―八。

(9) フィロン『モーセ伝』一一・二九一。

（続く）